

神籠石

大野城市教育委員会



図1(左) 高良山神籠石の列石(久留米市教育委員会提供)



図1(右) 鹿毛馬神籠石の列石(飯塚市教育委員会提供)

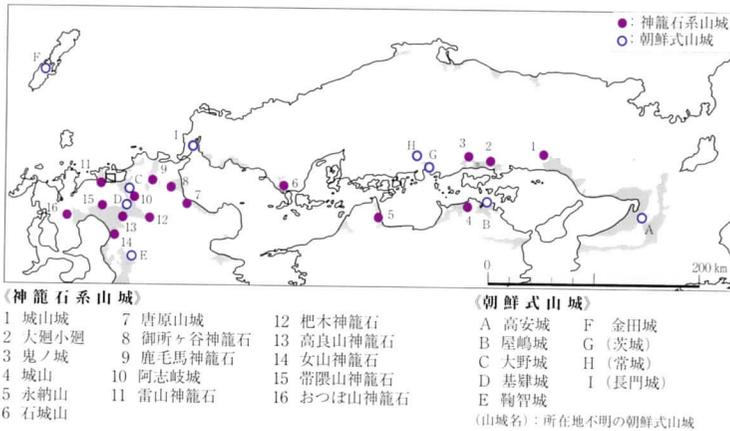


図2 西日本神籠石分布図(向井一雄 2004より改変)

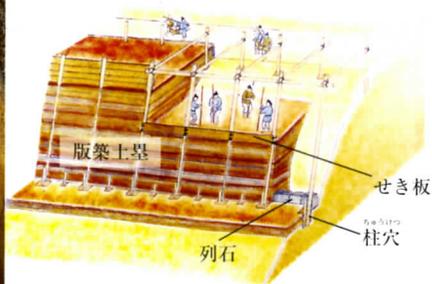
鎌倉時代に記された『高良玉垂宮縁起』では、高良大社(福岡県久留米市)参道脇にある「馬蹄石」のことを「神籠石」としています。この「馬蹄石」は、高良の神が神馬の蹄の跡を残されたという伝承を持つ磐座として崇められています。「神籠石」はこのように高良大社の磐座を指す用語でしたが、1898(明治31)年に高良大社を巡る列石(方形の切石を列状に配置したもの)が神籠石として考古学界に紹介され、その後類似の遺跡も神籠石と称するようになりました(図1)。

神籠石の性格については、霊域説と山城説の2つの学説が唱えられてきました。霊域説では、列石は神聖な場所(豪族の墓など)を囲むためのものとされました。一方、朝鮮半島の山城との比較から、神籠石を山城とする説も唱えられました。これらの二つの説をめぐっては、20世紀初頭を中心として活発な論争が行なわれました。

その後、1960年代になって行なわれたおつぼ山神籠石(佐賀県武雄市)や石城山神籠石(山口県光市)の発掘調査により、列石が土塁によって覆われていたことが明らかとなります。このような発掘調査の成果によって、山城説が有力な説として一般化しました。このような点を踏まえ、『日本書紀』に記載のみられる大野城跡などの朝鮮式山城と区別して、古代山城のうち文献に記載されていないものをまとめて「神籠石」あるいは「神籠石系山城」と呼んでいます。このような神籠石・



列石・版築土塁



土塁構築復元図



図3 御所ヶ谷神籠石の列石・土塁と石塁 (行橋市教育委員会提供)

中門

神籠石系山城と呼ばれるものは、現在までに北部九州から瀬戸内海沿岸にわたって16箇所みつかっています(図2)。

多くの神籠石では、土塁が約2～3kmにわたり山地に巡らされます。土塁は多くの場合、基底前面に方形の切石を一段配列し(図3上段)、その上に「版築」とよばれる工法で土を盛り上げて造ります。版築は水城にもみられる工法で、図3上段右図のように板(せき板)と柱による土止め施設を作りながら、砂や粘土を少しずつ突き固めて層状に積み上げてゆく工法です。また、谷では水門と石塁が築かれるという特徴がみられます(図3下段)。

このように発掘調査の成果によって、神籠石は山城として理

解されるようになってきましたが、神籠石がいつ頃、どのような目的で作られたのかについては多くの説があります。築かれた時代だけでも、3世紀頃とする説から9世紀後半～10世紀初頭とする説まで多岐にわたります。中でも、列石の加工技術、『日本書紀』に記載されている朝鮮式山城との類似性、発掘調査で出土した土器の時期などのさまざまな点から、6世紀末以降8世紀初頭までの間に造られたものとする意見が多くみられます。この期間の中もさらに築造時期をめぐる異なる見解がみられ、それに加えて築造の目的についても意見が分かれます。代表的なものだけでも、朝鮮半島の7世紀頃の状況に対する防衛施設、中央政権による地域支配のための施設、対外防衛施設から九州を中心とした地域統治のための施設への変質を考える意見などさまざまです。

(H21.12)

《参考文献》

- 岩永省三 2002「神籠石」・「神籠石論争」『日本考古学事典』(三省堂)
- 穎田町教育委員会 1998『国指定史跡 鹿毛馬神籠石(穎田町文化財調査報告書第4集)』
- 久留米市 2008『郷土の文化財』
- 宮小路賀宏・亀田修一 1987「神籠石論争」『論争・学説 日本の考古学6 歴史時代』(雄山閣)
- 向井一雄 2004「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』
- 向井一雄 2007「神籠石系山城」『東アジア考古学辞典』(東京堂出版)
- 行橋市教育委員会 2006『史跡 御所ヶ谷神籠石Ⅰ(行橋市文化財調査報告書第33集)』
- 行橋市歴史資料館 2008『平成20年度特別展 激動の7世紀・御所ヶ谷神籠石とその時代・』